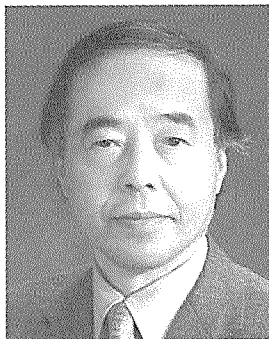


業績目録（田中英道）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 東北大学史料館 |
| 号 | 907 |
| 発行年 | 2005-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00065724 |

田中英道教授業績目録

平成17年 3 月
東北大学史料館
(著作目録第 907 号)



田 中 英 道 教 授 略 歴

生年月日 昭和17年2月20日生
本 籍 地 東京都
所 属 文学部美学西洋美術史学科

学 歴

昭和39年（1964年）3月 東京大学文学部フランス文学科卒業
41年（1966年）3月 同 美術史学科卒業
4月 東京大学文学部美術史学科大学院入学
41年（1966年）10月 フランス政府給費生として留学
44年（1969年）6月 ストラスブール大学ドクトラ（PhD）取得
45年（1970年）7月 国立西洋美術館研究員
48年（1973年）4月 東北大学文学部講師
48年（1973年）10月 イタリア政府給費生としてローマ大学留学
ー49年（74年）9月
51年（1976年）4月 東北大学文学部助教授
53年（1978年）10月 西ドイツ、ミュンヘン美術史研究所留学
ー54年（79年）9月
平成2年（1990年）2月 ローマ大学客員教授
4年（1992年）4月 東北大学文学部教授（美学・西洋美術史講座）
5年（1993年）5月 ローマ大学客員教授
8年（1996年）2月 東北大学文学博士号取得
15年（2003年）4月ー9月 ベルリン・フンボルト大学招聘教授
17年（2004年）3月 東北大学大学院文学研究科（美術史学講座、美学・西洋美術史専攻分野）教授を定年退官（予定）

国際学会発表・海外講演（括弧は発表言語）

- 1969年 9 月 ブダペスト大学国際美術史学会「ラ・トゥールの様式変遷」（仏語）
- 1973年 9 月 グラナダ大学国際美術史学会「ラ・トゥールの新発見作品について」（仏語）
- 1980年10月 メキシコ・シティ大学国際学会コロキウム「システィナ礼拝堂天井画について」（英語）
- 1981年 9 月 チューリヒ国際美術史学会「ジョットのモンゴルの影響について」（英語）
- 1986年11月 ローマ大学講演「ミケランジェロのシスティナ礼拝堂天井画について」シエナ市主催「美術保護の問題」（伊語）
- 1989年 9 月 ストラスブール大学国際美術史学会「レオナルド・ダ・ヴィンチのスフォルツァ騎馬像について」（仏語）
- 1991年 4 月 リーハイ大学レオナルド学会「スフォルツァ騎馬像の再建」（英語）
- 1994年10月 上海大学講演「西洋美術への東洋の影響」（日本語）
- 1997年 6 月 リュブリアナ大学国際美学会準備会「日本美術の美学」（英語）
- 1998年 9 月 リュブリアナ大学国際美学会「気韻生動の美学」（英語）
- 1998年 9 月 ボローニャ大学講演「日本美術の様式発展」（伊語）
- 1999年 3 月 ボローニャ大学「自然と感情」学会「レオナルド・ダ・ヴィンチと中国美術」（英語）
- 1999年 5 月 モスクワ大学バルトゥルシャイティス学会「シモーネ・マルティーニと中国美術」（英語）
- 1999年 5 月 ローマ大学M・ブッサーリ教授記念学会「シエナ絵画への中国の影響」（伊語）
- 2000年 2 月 ニューヨーク・アメリカ美術史学会 IRSA シンポジウム講演「比較美術について」（英語）
- 2000年 3 月 ボローニャ大学バルトゥルシャイティス学会「アナモルフォーズと北斎」（伊語）
- 5 月 ポーランド・クラカウ IRSA 学会「セザンヌとジャポニスム」（英語）
- 7 月 中国・内モンゴル・フフホト美学会「気韻生動の美学」（英語）
- 9 月 ロンドン大学 SOAS「写楽は北斎である」（英語）
- 10月 ボローニャ大学美学会「日本美術と気韻生動」（英語）
- 11月 ローマ大学「フォンタネージとジャポニスム」「イタリアと明治美術学会」（伊語）
- 2003年10月 リトワニア・ヴィリニウス大学講演「ワットーとシノフズリー」（英語）
- 2004年 8 月 モントリオール大学国際美術史学会「ミケランジェロのダヴィデと国中連公麻呂の四天王像について」（英語）
- 9 月 フランス、スリシー城・国際シンポジウム『『善政』の風景画の成立』（仏語・英語）

国内学会発表

- 1965年 美術史学会「ラ・トゥールの様式変遷」
- 1972年 美術史学会「レオナルド・ダ・ヴィンチ『三王礼拝』の二重人物像について」
- 1975年 ミケランジェロ生誕500年記念学会「システィナ礼拝堂天井画裸体像について」
- 1976年 美術史学会例会「ドレスデン美術館所蔵フェルメールの手紙を読む女について」
- 1977年 美術史学会例会「ミケランジェロのパオリーナ礼拝堂壁画について」
- 1991年 美術史学会例会「国中連公麻呂の作品同定」
- 1992年 美学会「西洋と日本の美術史の方法論の問題」
- 1994年 イタリア学会「ミケランジェロとダンテ、ヴェルギリウス」
- 2002年 美術史学会「雪舟の問題」「シンポジウム・美術史の価値の問題」（於東北大学）

2004年 イタリア学会「ミケランジェロ『ダヴィデ』と國中連公麻呂『四天王』」（於東北大学）他

美学・西洋美術史研究室主催・国際シンポジウム発表

1986年 「ドナテッロ生誕600周年記念学会」フィレンツェ，アカデミア美術館長ボンサンティ氏招待
1987年 「ジョット没後650周年記念学会」フィレンツェ，アカデミア美術館長ボンサンティ氏招待
1988年 「レオナルド学会」ローマ大学マルテーゼ教授招待
1990年 「ミケランジェロ『システィナ禮拜堂天井画』学会」ナポリ大学デ・マイオ教授招待
1993年 「ラ・トゥール生誕四百年記念講演会」久留米大学ルイヨ教授招待
1994年 「ティントレット没後400周年記念シンポジウム」
1996年 「国際シンポジウム：日本美術をどう見るか」
1997年 「マルロー没後20周年記念シンポジウム」
1999年 「ヴァン・ダイク生誕400周年記念国際シンポジウム」『artibus et historiae』誌編集長
グラブスキー氏招待
2000年 「夏の美術シンポジウム＜明治初期のイタリア美術家の役割＞」ピアチェンツァ，リッチ・オッディ美術館長フガツァ氏招待
『美術史学』第20号刊行記念学会」
『artibus et historiae』20周年記念講演会」グラブスキー氏招待
2001年 「国際シンポジウム 日伊文化交流の五百年」ローマ大学コッラディーニ教授招待
2002年 「第18回民族藝術学会大会」（於東北福祉大学）
「第55回美術史学会全国大会」
2003年 「西洋美術における古典主義の諸相にかんする包括的研究会」
1981年～2004年 116回にわたり研究室読書会「芸術と思想」を開催

学会及び社会における活動等

（１） 他大学への出講

大阪大学，名古屋大学，富山大学，四国学院大学，岩手大学，北海道教育大学旭川校，福島大学，会津大学短期学部（毎年），東北工業大学（同），宮城大学（同），東京芸術大学

（２） 学会役員

国際美術史学会副会長（2004～）
Artibus et Historiae（ウィーン国際美術雑誌）編集委員
国際美術史学会日本副代表（2000～2004），代表（2004～）
美学会常任委員（1991～1998）
日仏美術学会常任委員

（３） 社会活動・地方関係機関の委員等

仙台・日伊協会・専務理事（1976～90）
仙台婦人セミナー講師（1982～）
宮城県「文化の波文化の風おこし」委員会委員（1990年）
宮城県「東北学おこし」委員会委員（1991～93年）

石巻市国際交流特別顧問（1991～92年）
「新しい歴史教科書」をつくる会・宮城県支部長（1999～2001年）
「新しい歴史教科書」をつくる会会長（2001～2004年）
阿部次郎記念館・運営委員（2002～05年）

（４） 国内講演会 九州・熊本から北海道・札幌まで多数。

賞 罰

昭和55年（1980年） イタリア政府文化勲章（ブロンズ）
平成12年（2000年） IRSA 賞（美術研究所学術賞）

最終年授業担当

学部学科の名称 文学部美学西洋美術史学科
文学研究科美学・美術史専攻

| | | |
|---------|----------|--|
| 担当授業科目名 | 文学部 | 西洋美術史普通講義Ⅰ，Ⅱ 西洋美術史特殊講義Ⅰ，Ⅱ 西洋美術史演習Ⅰ，Ⅱ 西洋美術史基礎講読Ⅰ，Ⅱ 西洋美術史実習Ⅰ，Ⅱ |
| | 文学研究科 | 西洋美術史特殊講義 西洋美術史演習 西洋美術史実習 |
| 兼業先 | 東北工業大学 | 造形美学 |
| | 会津大学短期学部 | 人間と美術 |
| | 宮城大学 | 西洋美術史 |
| | 東京芸術大学 | 近代フランス美術史 |

業 績 目 録

I. 著 書

(書名, 発行年月, 発行所, 頁数, 概要の順に記述, 共著もその半分以上執筆しているものだけをとりあげた)

1. *L'oeuvre de Georges de La Tour*. 1969年(昭和44年) 6月
 Université de Strasbourg (dactographié) 188p, 200 illustrations.
 17世紀のフランスの画家ラ・トゥールについて, 様式とその図像から分析し, 当時ほとんど未解明であった『聖セバスティアヌス』図をはじめ, 『聖ヒエロニムス』図などの年代設定を行い, とくにその作風形成の時代を検討して, 後の研究に大きな影響を与えた。その後1972年にパリで大展覧会が行われた際のカatalog, その後のこの画家のモノグラフに基本文献として掲載され, 引用も多くされている。
2. 邦訳『ラ・トゥール 夜の画家の作品世界』造形社 1972年(昭和47年), 246頁, 図版56頁(付仏文レジュメ)
3. 『冬の闇 夜の画家ラ・トゥールとの対話』新潮選書 1972年(昭和47年), 214頁
 ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールについての文学的エッセイ。雑誌『季刊藝術』に連載されたものを一冊に収録。
4. 『ミケランジェロ』(世界美術全集6) 吉川逸治との共著 集英社 1975年(昭和50年), 121頁
 ミケランジェロの全作品を分析しながら, その思想的, 形象的意義を跡づけたもの。代表作システィナ礼拝堂天井画に四大元素などの擬人像があることの指摘や, レオナルド・ダ・ヴィンチの影響があることが分析されている。『ピエタ』像の系譜をたどり, 最後の『ロンダニーニのピエタ』にレオナルド・ダ・ヴィンチの愛の二重人物像の形象があることを述べている。全作品カATALOGを制作し, 1点1点を解説した。
5. 『文学の転身』泰流社 1976年(昭和51年), 254頁
 「日本文学とは何か」「西洋文学とは何か」という大きな主題のエッセイだけでなく, 漱石論, 江藤淳論, 三島論などを含む著者の1975年(昭和50年)までの文学評論を集めたもの。
6. 『微笑の構造 レオナルド・ダ・ヴィンチの二重人物像』小学館 1977年(昭和52年), 205頁
 1970年にフィレンツェに私費留学した際, ウフィツィ美術館に通い, レオナルド・ダ・ヴィンチの『三王礼拝図』の中に, すべての人物がカップルで二人ずつ描かれているのを発見し, それが当時のネオ・プラトニズムの影響であることを解明した。その論文は学会誌に掲載され, 英文に翻訳されて, ケネス・クラークをはじめ研究者に大きな反響を呼んだ。その論文を中心に『モナ・リザ』に関する論考を集め, 一冊の本にしたもの。

7. 『レオナルド・ダ・ヴィンチ』(世界美術全集5) 下村寅太郎との共著 全作品解説, カタログを執筆 集英社 1977年(昭和52年), 124頁

レオナルド・ダ・ヴィンチの全作品を分析し, そこに通底する思想を探ったもので, 初期の『三王礼拝』図の図像的な解明から, 晩年の「大洪水」の構想まで, 巨匠の一貫した形象的表現を追求している。とくに全作品のカタログとして, 弟子との関係を留意したアトリビューションを行っている。また『モナ・リザ』の分析はこれが代表作であるだけに, モデルやその歴史的背景を追い, 国際的な新解釈として評価されている。

8. 『レオナルド・ダ・ヴィンチ』(世界の素描1) 講談社 1977年(昭和52年)(大版32頁)

レオナルドの素描は900点に及び, 彼の作品の重要な部分を占めるが, 絵画の準用のもの, 科学建築関係のものがある。しかしそれだけで独立した作品が多くそれらを分析すると意外に「グロテスク」テーマと「大洪水」のテーマが主なものとなっていることがわかる。彼が絵画という特性を認識したうえで「醜さ」と「恐ろしさ」を如何に表現するかに腐心しているかがこれらの素描からわかる。

9. 『レオナルド・ダ・ヴィンチ 芸術と生涯』新潮社 1978年(昭和53年) 320頁, 図版140, 付英文レジュメ

『レオナルド・ダ・ヴィンチ 芸術と生涯』講談社学術文庫版 1992年(平成4年) 426頁(解説・杉浦明平)

レオナルド・ダ・ヴィンチの二重人物像の発見を機に, 巨匠の研究をさまざまな観点から行い, 『アンギアリの戦い』, 『岩窟の聖母』, 『聖アンナ画稿』, シャンボール宮などの新発見を加えながら, その全作品とその生涯を書いたもの。彼の絵画論にある, 芸術に対する考察, その主題の分析を行い, レオナルドの全く新しい作家論を展開している。これはルネサンス研究家杉浦明平により同年のベスト・スリーの書物と評価され氏の解説が加えられて, 1992年に講談社学術文庫により再版された。

10. イタリア語訳 *Leonardo da Vinci, la sua arte e la sua vita*, tradotto da Toshiko Tanaka e Mario Zallio, Suwa, 1983. 292p. 141. illustrations.

11. 『若き日のミケランジェロ』1979年(昭和54年) 講談社 212頁, 図版80(付英文レジュメ) 『ミケランジェロ』講談社学術文庫版 1991年(平成3年) 302頁(解説・中江彬)

1975年に東京でミケランジェロ生誕500年記念学会が開かれた際, 筆者はシスティナ礼拝堂天井画の分析を行い, 天井画中央の5組ある四裸体像が, 四大元素, 四気質, 四つの時などの擬人像であることを解明した。またミケランジェロの青年期の作品を検討し, そこに父, 母へのコンプレックスが反映していることを指摘し, その芸術の中にまたレオナルド・ダ・ヴィンチとの対決もあったことも分析した。この書物は1991年に中江彬の解説のもとに講談社学術文庫により再版された。

12. 『ル・ネサンス像の転換 理性と狂気が融合するとき』講談社 1981年（昭和56年）317頁，図版97，付英文レジュメ

筆者はブルクハルト以来の「ルネサンス」という概念の検討を行い，これが古代ギリシャ・ローマと近代西洋を結ぶ結節点として，西洋中心主義のイデオロギーを担うものであることを指摘した上で，果たして「ルネサンス」文化が「古代」の再生か，という疑問に答える。まずゲルマン民族の大移動やイスラム文化によって断絶しており，13,14世紀のモンゴルの西征による東洋の存在に刺激を受けた結果が「ルネサンス」であり，それは新しいキリスト教文化，ルネサンスであると結論する。これは西洋歴史観の批判として評価されている。

13. 『画家と自画像 描かれた西洋の精神』日本経済新聞社 1983年（昭和58年）210頁，図版130
『画家と自画像 描かれた西洋の精神』講談社学術文庫版 2003年（平成15年）260頁

西洋美術史における自画像の歴史をとらえ，そこに西洋の思想史の変化を論述したもの。15世紀イタリアの画家自身が職人から芸術家への意識の変遷の中から，芸術家自身の創造主としての自意識が生まれた時代から現代までの変化をとらえている。とくにレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ，デューラーそしてレンブラントなどの巨匠からゴッダ，ピカソなどの近，現代の大画家がどのように自己を描いたか，具体的に論じ，メランコリーから無関心への人間観を指摘している。

14. 『ミケランジェロ』（世界の大画家8）中央公論社 1983年（昭和58年）98頁
ミケランジェロの絵画作品のみを論じたもので，そのカタログの記述を行っている。弟子の作品と区別し，巨匠の参加の度合いも指摘している。とくにシスティナ礼拝堂天井画の記述では，これが創世記の図解だけでなく，四裸体像のように当時の宇宙観の反映があり，それだけではなく全画面，全人物像に渡って四大元素などを中心にした擬人像として描かれていることを述べている。さらに『最後の審判』『聖パオロの殉教』『聖ペテロの磔刑』などのあらたな解釈を行っている。

15. 『フォルモロジー研究 ミケランジェロとデューラー』美術出版社 1984年（昭和59年）372頁，図版232（付英文，独文，伊文レジュメ）

これまでの両巨匠の個別研究の集大成で七編の論文と「フォルモロジー」という，著者の新しい美術の分析方法を示した序文をつけ加えている。これは（1）形象の取出し（2）比較（3）解釈（4）作家（5）歴史の5段階で，美術作品と分析してゆくもので，これを各論文で適合させている。とくに作家固有の図像学に注目しこれまでと異なった分析を示しており，それがミケランジェロとデューラーの作品に応用されてこれらの美術の新たな解釈と行なっている。

16. 『光は東方より 西洋美術に与えた中国・日本の影響』河出書房新社 1986年（昭和61年）310頁 図版227, 付英文レジュメ

本書は3部に分かれ、第1部はジョットの時代（イタリア14世紀）のモンゴルを通じて東洋の影響をバズパ文字模様や容貌表現から指摘し、第2部ではシノワズリーの影響を17世紀のオランダ、フランス美術から、第3部ではジャポニスムの問題をフランス印象派を中心として論じている。この書によってあらたな視野が開かれ西洋で引用されたり、NHK『大モンゴル』などの番組の骨格が作られたりしている。

17. 『ルーヴル美術館3 ルーヴルとパリの美術』（吉川逸治、佐々木英也との共著。15, 16世紀イタリア美術担当）小学館 1985年（昭和60年）575頁

筆者は15, 16世紀のイタリア美術史を担当し、およそ300枚の原稿を書いている。ルーヴル美術館の作品は解説の形で行なっているが、本文では15世紀イタリア美術史の流れを自然主義と唯美主義に区別し、またマニエリスムの時代もそれとメランコリスムと区別し、新しい区分を行い、あらたな提起を行なっている。

18. 『イタリア美術史 東洋から見た西洋美術の中心』岩崎美術社 1990年（平成2年）640頁、図版550

日本人学者が書いたのはじめてのイタリア美術史の書。14世紀絵画の東洋の影響をはじめ、16世紀の「巨匠の誕生」では筆者のこれまでのレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロの研究の集大成を行い、さらにこれまでの「マニエリスム」の名でくられてきた画家を「メランコリスム」と区別したり、社会の変化とともに17世紀以後の美術を論じ、20世紀のその衰退まで、その流れを明快におっている。

19. 『美術にみるヨーロッパ精神』弓立社 1993年（平成5年）220頁

西洋美術史上のさまざまな問題、例えば修復された絵画や、自画像の系譜や、ラファエルロ、ゴヤ、デューラー、ダリなど近代画家と過去の芸術家の関係を論じたものなどを収録したもの。とくにラファエルロやダリの論考は新所見として学会でも引用されている。

20. 『西洋美術コレクション名作集』『同全作品集』西洋美術史研究所 1993年（平成5年）各80頁・171頁

日本の西洋美術作品の個人コレクション約550点の調査、選別を行ない、その全作品のカタログを制作したもの。とくにその中で80点ほどを選別し、名作集として編んだ。これらの作品は大部分は西洋でも未発表のもので、あらたな調査と同定作業が必要であった。中にはレンブラント、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエルロの真作があるが、ティントレット、ルーベンス、ヴァン・ダイクなど新たな調査が必要で、このカタログ集自体、生の作品を相手にした研究の一端である。（但しこのコレクション自体、未だに成立していない—2004年注）。

21. 『支倉六右衛門と西欧使節』丸善ライブラリー 1994年（平成6年）228頁
筆者によるローマ、キリナーレ宮において支倉六右衛門とその一行のフレスコ画同定及び、ボルゲーゼ宮における同人物の肖像の作者発見の美術史的研究のあらたな作業によって生まれた、支倉六右衛門の西欧使節の分析の書。西欧における当時の高い評価はこの使節のあらたな検討を必要とする。美術史の発見からあらたな歴史の検討を行なっている。
22. 『イタリア・ルネサンス2』（世界美術大全集12）久保尋二，長尾重武との共著（『ミケランジェロ・ブオナローティ』89－180頁，「16世紀初期のフィレンツェ美術・メランコリスムの傾向」245－272頁，「素描芸術の確立」353－364頁の各項および作品解説担当）小学館 1994年（平成6年）466頁
ミケランジェロのシスティナ礼拝堂天井画の修復が終了し，その調査結果にもとづきこの巨匠の新たな面を掘り起こしている。修復以後の最も新しい全体論である。またあらたにアンドレア・デル・サルトや「メランコリスム」の研究を行い，「素描芸術」の役割の大きさも論じている。世界に先駆けて『最後の審判』の修復後最初の写真を掲げ，その検討を行なっている（28－109頁）。
23. 『日本美術全史 世界から見た名作の系譜』講談社 1995年（平成7年）398頁
長年の西洋美術の研究から，あらたな視点で日本美術全史を見なおしたもの。とくに日本美術史で欠けていた「様式史」を導入し，奈良時代に「古典主義」をおき，平安時代に「マニエリスム」そして鎌倉時代に「バロック」を様式として分析し，作品の世界的な価値を論じたもの。日本で初めての「様式論」的な日本美術史であり，作家中心の絵画・彫刻史である。
24. 『天平のミケランジェロ 公麻呂と芸術都市・奈良』弓立社 1995年（平成7年）236頁
西洋美術の研究方法からあらたな「様式」論的な研究にもとづき，奈良時代の東大寺大仏の建立の時代の作家，国中連公麻呂の作品を認定した論文を中心に，奈良時代の芸術，仏教の個性的な存在や名前的重要性を指摘し，この時代の文化の世界的な価値を論じたもの。ここには「止利仏師」が『救世観音』の作者である，という新たな指摘もある。
25. 『運慶とバロックの巨匠たち「仁王」像は運慶作にあらず』弓立社 1997年（平成9年）254頁
鎌倉時代の美術を動勢の強いバロック様式にとらえ，運慶，湛慶，康弁，康勝，定慶らの彫刻作品を分析しカタログを付し，さらに画家として『源頼朝』像などの肖像画を藤原信実，『平治物語絵詞』を住吉慶忍に，また『大燈国師』を無等周位にそれぞれアトリビュートし，それぞれの作品をカタログを付して論じている。

26. 『ミケランジェロの世界像 システィナ礼拝堂天井画の研究』東北大学出版会
1999年（平成11年）400頁，図版多数
(*Michelangelo's Vision of the World, The studies of Sistine Chapel ceiling paintings*, Tohoku University Press, 1999, 400p.)
1985年から90年にかけてシスティナ礼拝堂天井画の調査に基づく、『美術史学』に七回にわたって分載された調査報告書をまとめたもの。五百年に一度という修復が行なわれた天井画を足場の上ってくわしく調査したもので、その技法と同時に、その全体の四大元素を基本にして擬人像としてとらえたもの。これは東北大学に提出され、文学博士論文となったものである。

27. 『写楽は北斎である』祥伝社 2000年（平成12年）404頁，図版多数
日本美術史上の謎，写楽は一体誰か，という問題に答え，写楽＝北斎説を詳しく展開したもの。山根有三教授の推薦の辞にもあるように，その類似性を明確に論じている。これ以後，この説を批判する説は出ていない。

28. 『歴史のかたち 日本の美 論争・日本文化史』徳間書店 2001年（平成13年）222頁
日本の歴史，文化史をさまざまな角度から論じたエッセイ集。網野善彦，梅原猛，蓮見重彦，さらに小林秀雄らも組上にのぼっている。

29. 『法隆寺とパルテノン 西洋美術史の眼で見た新・古寺巡礼』祥伝社 2002年（平成14年）306頁
奈良，京都の仏教美術を中心としたチチェローネ（案内書）。法隆寺とパルテノンをはじめ，西洋の諸美術と比べながら，その芸術的特質を論じ，その価値づけから諸寺を訪問すべきと説いており，単なる名所旧跡めぐりと異なる案内となっている。

30. 『まとめて反論「新しい歴史教科書」の思想』扶桑社 2002年（平成14年）200頁
日本の中学の歴史教科書のマルクス主義的偏向を批判する運動に加わり，著者が「新しい歴史教科書をつくる会」の会長を務めたときの，その教科書に対する批判，非難に答えたもの。共産党不破哲三議長，大江健三郎，「歴史修正主義」批判，美術史学会シンポジウムにおける千野香織氏らのフェミニズムからの批判にまとめて反論している。

31. 『国民の芸術』扶桑社 2002年（平成14年）754頁
筆者の日本の芸術に対する二十六章に及ぶ，原始から現代に至る大エッセイ集。『新しい歴史教科書』をつくる会の運動とともに，日本の歴史・文化をあらたな視点から再構築したもの。歴史に従っていかに日本の芸術が変化したか，その文化的な営みを基礎に起きながら，その世界的な特質を論じており，日本文化論の“金字塔”と評価される。

32. 『古都の美をめぐる 大人の旅』扶桑社 2003年（平成15年）166頁
奈良・京都の古寺の見所を、芸術的価値に従ってガイドしたもの。著書29のガイド・ブック版で、旅行案内として編集されている。
33. 『日本美術 傑作の見方感じ方』PHP研究所 2004年（平成16年）290頁
日本美術史をどう見るか。これまでの大著、専門書を統合して、わかりやすく新書版にしたもの。
34. 『聖徳太子虚構説を排す』PHP研究所 2004年（平成16年）206頁
筆者のこれまでの聖徳太子論の集大成。とくに2001年に五重塔の心柱が594年という伐採年代が測定されたのを基本に、法隆寺の非再建説を展開したもの。聖徳太子が建てた斑鳩寺が、若草伽藍が焼けたあと、法隆寺となったもので、それはもともと飛鳥時代に建てられていたものとして、再建説を否定している。同時に三経義疏が太子の著作であり、その思想がその生き方を貫いていることも論じた。
35. 『日本史観の確立』（仮題）PHP研究所 2005年（平成17年）刊行予定
西洋のキリスト教史観、ギゾーなどの近代史観、ヘーゲル史観、ランケ、ウェーバー、マルクス、そしてアナル派など、日本の歴史観に影響を与えた西洋の歴史観を研究し、また皇国史観、マルクス史観などによる日本史の見方を批判し、あらたな日本の歴史観の確立をめざした歴史観の検討の書。
36. 『やさしく書かれた日本の歴史』（仮題）PHP研究所 2005年（平成17年）刊行予定
筆者は「新しい歴史教科書」をつくる会の会長をつとめたが、中学校の歴史教科書を、学習指導要領会やつくる会から離れて自由に口語体で日本史の概略を書いたもの。

編 著

1. 『西洋美術への招待』東北大学出版会 2002年（平成14年）（監修・執筆）
2. 『国際シンポジウム 日伊文化交流の500年 報告書』2003年（平成15年）ローマ大学出版部

訳書（共訳を含む）

1. F.G. パリゼ『古典主義美術』岩崎美術社 1972年
2. E. オルランディ編『ダンテ』（田中俊子との共訳）評論社 1976年
3. E. オルランディ編『ディッケンズ』（田中俊子との共訳）評論社 1976年
4. E. オルランディ編『ジョット』（田中俊子との共訳）評論社 1980年

5. E. オルランディ編『デューラー』評論社 1980年
6. Ch. トルナイ『ミケランジェロ 彫刻家・画家・建築家』岩波書店 1978年
7. 『ルネサンス画人伝』（レオナルド・ダ・ヴィンチ, ミケランジェロ担当, 森雅彦との共訳）白水社 1982年
8. E. ウィント『ルネサンスの異教秘儀』（藤田 博, 加藤雅之との共訳）晶文社 1986年
9. クリバンスキー, パノフスキー, ザクスル『土星とメランコリー』（榎本武文, 尾崎彰宏, 加藤雅之との共訳）晶文社 1991年

A 研究論文

1. 「ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールの画風変遷の一考察 — 細部描写の検討による —」『美術史』64 1967年3月 129-143頁（付仏語レジュメ）
2. “Georges de La Tour dans ses rapports avec Le Clerc, Callot et Rembrandt”, *L'Information d'Histoire de l'Art*, 1970 mars-avril, pp.55-60.
邦訳「ラ・トゥールとル・クレール, カロー, レンブラントとの関係」『国立西洋美術館年報』4 1970年 47-57頁
3. “Une Analyse des oeuvres de Georges de La Tour”, *Actes des Congrès International Histoire de l'Art*, 1969 (publié en 1971), pp.270-275.
4. 「レオナルド・ダ・ヴィンチ『三王礼拝図』の一考察, その二重人物像について」『美術史』80 1971年3月 137-160頁（付仏語レジュメ）
5. “The Double Persons in the Adoration of the Magi of Leonardo da Vinci”, *Annuario X*, Istituto Giapponese di Cultura a Roma, 1972-73, pp.81-108, 48 figures.
6. 「北斎, 広重とヴァン・ゴッホ」『国立西洋美術館年報』5 1971年 14-24頁（付仏語レジュメ）
7. 「モネと日本浮世絵」『国立西洋美術館年報』6 1972年 33-44頁
8. 「<裸>と<着衣>のあいだ [ゴヤ論]」『美術手帖』353 1972年3月 204-219頁
9. 「パリのラ・トゥール展」『みづゑ』813 1972年11月 80-84頁
10. “Una nuova analisi sulla Sant’Anna e sul San Giovanni di Leonardo da Vinci, dal punto di vista dei ‘doppi personaggi’”, *Annuario XI*, 1973-74, pp.53-64, 21 fig.

11. 「アンジェリコの時間 ― キリスト教芸術論序説」『ユリイカ』1973年9月 212
―219頁
12. 「フランス・ルネッサンス美術, ディアースの森」『学燈』1973年12月 48-51
頁
13. 「ゴシックとルネッサンス」同誌 1974年1月 44-47頁
14. 「“最高の画家” との出会い」同誌 1974年2月 48-51頁
15. 「“この上なきキリスト者たる” フランス王」同誌 1974年3月 44-47頁
16. 「幻のロモランタン宮」同誌 1974年4月 44-47頁
17. 「“ゴシック” と “ルネッサンス”」同誌 1974年5月 38-41頁
18. 「フランス宮廷への誘い」同誌 1974年6月 48-51頁
19. 「新しき肖像画」同誌 1974年7月 47-50頁
20. 「アンドロギュノスの王の姿」同誌 1974年8月 47-50頁
21. 「ふたごのヴィーナス」同誌 1974年9月 44-47頁
22. 「裸のモナ・リザたち」同誌 1974年10月 45-48頁
23. “Une Observation sur les tableaux doubles de Georges de La Tour”, Actes de
Congrès International d’Histoire de l’Art de Grenade, 1974, pp.72-84.
24. 「フラゴナール『錠前』について」『美術史』89 1975年9月 22-24頁
25. 「ミケランジェロ作システィナ礼拝堂天井画の四裸体擬人像群, 四要素の表現
として」『Spazio』12 1976年 52-68頁, 47図。
再録『ミケランジェロ研究 ― 生誕五百年記念ミケランジェロ学会報告』
平凡社 1978年 93-138頁
26. “A New Analysis of Ignudi in the Sistine Chapel Ceiling by Michelangelo, As
symbols of fourfold elements”, *Spazio* 12, 1976, pp.53-68, 47 fig.
27. “Leonardo’s Isabella d’Este, A New Analysis of Mona Lisa in the Louvre”,
Annuario, XII, 1976-77, pp.23-35, 7 fig.
28. 「ジャポニスム ― マネとセザンヌ」『別冊太陽』冬号 1977年 165-171頁
29. 「浴槽のふたりのヴィーナス ― 『ガブリエル・デストレとその姉妹』の人文主
義的解釈」『美学』27(4) 1977年3月 52-63頁, 12図
30. 「御伽草子の絵と文章 ― 日本のルネッサンスへの疑義」『國文學 解釈と教材
の研究』22(16) 1977年12月 68-73頁

31. 「幻の壁画の再構成, レオナルドの『アンギアリの戦い』とミケランジェロの『カッシーナの戦い』」『Spazio』17 1977年 18-40頁, 32図
英文レジュメ “The Battle of Anghiari by Leonardo and The Battle of Cascina by Michelangelo”, *Spazio*, 1977, pp.40-42.
32. “Les Deux Vénus au Bain, Une nouvelle analyse de la ‘Gabrielle d’Estrées et une de ses soeurs’ du Louvre”, *Art History* (Tohoku University) 1, 1978, pp. 21-31.
33. 「チヴァーテ, サン・ピエトロ・アル・モンテ教会堂の壁画 — 身廊壁画断片新発見による再検討」『美術史学』1 1978年 33-56頁
再録『欧州中世美術史蹟学術調査報告』(東海大学調査団編) 東海大学 1978年 33-56頁
(伊文レジュメ) “Una nuova analisi del San Pietro al Monte di Civate—riguardante la Scoperta del frammento nuovo nella navata”, *Art History* (Tohoku University) 1, 1978, pp.49-50.
34. 「ミケランジェロ『最後の審判』とは何か — カヴァリエーリへのデッサンとの関係」『Spazio』22 1979年 78-99頁
35. “Il Giudizio Universale di Michelangelo e i disegni per Cavalieri”, *Annuario*, Istituto Giapponese di Cultura, XVII, 1980-1981, pp.21-50.
36. 「ラ・トゥール派の問題 — 新作品『火鉢を吹く少女』について」『美術史学』2 1979年 165-172頁
仏訳 “Problème de l’école de Georges de La Tour — A propos d’une nouvelle Fillette au braisier —”, *Art History* (Tohoku University), 2, 1979, pp.182-188, 21 fig.
37. “Four Slaves of the Tomb of Julius II by Michelangelo”, *Art History* (Tohoku University) 3, 1980, pp.17-23, 20 fig.
38. 「<ルネッサンス>期の「神」と「愛」, フィチーノとレオナルド」『神観念の比較文化論的研究』(東北大学文学部日本文化研究所編) 講談社 1981年 1155-1191頁
39. “Durers Portratkunst im Jahre 1526 und die ‘Vier Apostel’, Eine neue interpretation basierend auf dem Ausdruck des ‘Vier Temperamente’”, *Das Münster*, 3, 1981, pp.217-26.
40. 「デューラー作1526年の肖像画と『四使徒』像 — 「四気質」表現について」『美術史学』4 1982年 99-112頁, 20図
41. 「江戸の遠近法 — 浮世絵の西洋への影響」『季刊江戸っ子』29 1981年冬号 18-24頁

42. 「仙台で発見されたロマネルリの『巫女』図」『美術史学』4 1982年 119-124頁
伊文 “La ‘Sibilla’ di Romanelli scoperta a Sendai”, *Art History* (Tohoku University) 4, 1982, pp.126-130.
43. 「ジョットと中国絵画 — パルディ礼拝堂壁画の研究」『ルネッサンス美術とその世界像 — 日伊学術シンポジウム報告書』1982年 東京新聞社 293-317頁
伊訳 “Giotto e la Pittura Cinese, Un esame degli affreschi della Capella Bardi”, *L’Arte del Rinascimento e la sua Università, Atti del Simposio di Studi Italo-Giapponese*, 1-3 novembre 1980, Tokyo, 1982, pp.265-292.
44. 「ミケランジェロ作パオリーナ礼拝堂壁画の考察 — そのカヴァリエリとコロナへのデッサンとの関連」『東北大学文学部研究年報』31 1981年 143-190頁 (付英文レジュメ)
45. 「デューラーの四気質表現 — 肖像画, 聖母子及びヤーバハ祭壇画」同誌 33 1983年 71-110頁, 50図
46. 「ルーベンス派の『メレアグロスとアタランテ』とセザンヌの未公開デッサン — 秋田市・平野政吉美術館調査報告」『美術史学』5 1983年 5-16頁
英訳 “Meleagros and Atlante of the school of Rubens and an unpublished drawing of P. Cézanne, A Study of the works in Hirano-Masakichi Museum at Akita”, *Art History* (Tohoku University), 5, 1983, pp.1-4.
47. 「フェルメール・真珠の画家 — その東洋からの影響」『ユリイカ』16(3) 1984年3月 124-134頁
48. 「ジョットへのモンゴル, 中国の影響 — 『聖フランチェスコ伝』とスクロヴェーニ礼拝堂壁画の考察」『美術史学』6 1984年 172-151頁, 38図
英訳 “Giotto and the influences of the Mongols and the Chinese on his art — A new analysis of the Legend of St. Francis and the fresco paintings of the Scrovegni Chapel —”, *Art History* (Tohoku University) 6, 1984, pp. 174-188.
49. 「ペゴロッティの『商業指南』— 訳と注釈 (訳は田中俊子と共訳) 『イタリア学会誌』33 1984年 148-170頁 (付伊文レジュメ)
50. 「14世紀シエナ派絵画とモンゴル・中国の影響 — シモーネ・マルティーニとA. ロレンツェッティの主要作品分析」『美術史学』7 1985年 148-170頁, 49図
英訳 “Fourteenth Century Sienese Painting and Mongolian and Chinese Influences — The analysis of Simone Martini’s and Ambrogio Lorenzetti’s major works —”, *Art History* (Tohoku University) 7, 1985, pp.172-190, 147-136.

51. 「ワットーとシノワズリー、『シテール島への巡礼』について」『日本文化研究所報告』21 東北大学日本文化研究施設 1985年 45-68頁 (付仏文レジュメ)
52. 「<メランコリー>の現代的意義 ― デューラーの三部作に寄せて」『西洋芸術における「メランコリー」概念の史的考察』(昭和59・60年度科学研究費補助金 [一般研究B] 研究成果報告書) 1986年 1-16頁
53. 「ミケランジェロ作システィナ礼拝堂天井・壁画の図像プログラム ―『黄金伝説』序章とエジディオの講話の重要性 ヴァティカン・システィナ礼拝堂調査報告 第1回」『美術史学』8 1986年 66-82頁, 20図
英文レジュメ “The Program of the Ceiling paintings of Michelangelo in the Sistine Chapel. On the Libellus of Egidio da Viterbo and the Introduction of the Golden Legend”, *Art History* (Tohoku University) 8, 1986, pp.63-65.
54. 「ウィントの芸術論」エドガー・ウィント『ルネサンスの異教秘儀』(藤田 博, 加藤雅之との共訳) 晶文社 1986年 406-425頁
55. 「ミケランジェロの建築」『KAWASHIMA』22 1987年3月 7-8頁
56. 「初期イタリア美術史の再検討 ― ジョット以前」『東北大学文学部研究年報』36 1986年 (1987年発行) 27-68頁, 42図 (付英文レジュメ)
57. 「ボッティチェリ『書斎の聖アウグスティヌス』―アウグスティヌス<告白>の図」『季刊みづゑ』942 1987年3月 24-29頁
58. 「ミケランジェロ作『ノアの物語』―ヴァチカン, システィナ礼拝堂天井壁画・調査報告 第2回」『美術史学』9 1987年 5-72頁, 75図
英文レジュメ “The three scenes of Noah in the Sistine Chapel Paintings by Michelangelo (Summary)”, *Art History* (Tohoku University) 9, 1987, pp.196-198.
59. 「13, 4世紀イタリア絵画の中の東洋文字 ― ジョットを中心に」『イタリア学会誌』37 1987年10月 102-143頁, 44図 (付伊文レジュメ)
60. 「ミケランジェロ作, 預言者, 巫女像 ― システィナ礼拝堂天井・壁画・調査報告 第3回」『美術史学』10 1988年 117-120頁, 54図
英文レジュメ “Prophets and Sybils by Michelangelo in Sistine Paintings”, *Art History* (Tohoku University) 10, 1988, pp.57-74.
61. 「ジョット絵画における東洋文字表現」『日本文化研究所研究報告』24 1988年3月 101-118頁 (付英文レジュメ)
62. “Concezioni Scientifiche Adombrate dagli Affreschi Michelangeleschi della Capella Sistina”, *Annuario* dell'Istituto Giapponese di Cultura, Roma, 22.

63. 「ローマ、ボルゲーゼ宮『支倉常長』像の作者について」『仙台市博物館調査研究報告』8 1988年 1-20頁, 31図
 仏訳 “Le Portrait de Hasekura par Claude Deruet”, *Bulletin de la Société Franco-Japonaise d'Art et d'Archéologie*, No.8, 1988, pp.13-24, 20 fig.
64. 「世界の中の日本美術 序論 日本美術の「普遍」性のために」『季刊 MOA 美術』27 1988年夏 46-51頁
65. 「世界の中の日本美術 第1章 原始美術の評価」同誌 28 1988年秋 44-51頁, 9図
66. 「世界の中の日本美術 第2章 「アルカイズム」の時代 — 飛鳥時代の美術」同誌 29 1989年冬 56-63頁
67. 「世界の中の日本美術 第3章 「クラシシズム」初期の美術 — 白鳳時代の彫刻・絵画」同誌 30 1989年春 52-59頁
68. 「レオナルド・ダ・ヴィンチ『スフォルツァ騎馬像』の再建」『東北大学文学部研究年報』38 1988年 1-30頁, 40図 (付英文レジュメ)
69. 「ミケランジェロ作『民族の英雄達』と『キリストの祖先達』(第1期) — システィナ礼拝堂天井壁画調査報告, 第4回」『美術史学』11 1989年 15-37頁, 25図
 英文レジュメ “Spandrels and Lunettes of Sistine Chapel by Michelangelo (the first period 1508-1509), *Art History* (Tohoku University), 11, 1989, pp.38-39.
70. 「世界の中の日本美術 第4章 「クラシシズム」中期の美術 — 天平時代の彫刻 1」『季刊 MOA 美術』31 1989年夏 54-61頁
71. 「ローマの支倉常長」『ローマの支倉常長と南蛮文化：日欧の交流・16-17世紀』仙台市博物館 1989年 100-107頁
72. 「世界の中の日本美術 第5章 「クラシシズム」美術 — 天平時代の彫刻 2」『季刊 MOA 美術』32 1989年秋 50-57頁
73. “Oriental Scripts in the paintings of Giotto's Period”, *Gazette des Beaux-Arts*, Mai-June 1989, pp.214-226, 15 fig.
74. “Le Portrait du Samourai Hasekura Tsunenaga par Claude Deruet”, *Le Pays Lorrain*, No.3, 1989, pp.161-164, 7 fig.
75. 「世界の中の日本美術 第6章 「クラシシズム」美術 — 天平時代の彫刻 3」『季刊 MOA 美術』33 1990年冬 50-57頁
76. 「世界の中の日本美術 第7章 「クラシシズム」美術 — 天平時代の彫刻 4」同誌 34 1990年春 50-57頁

77. 「ミケランジェロ作『アダムとエヴァ』3場面と第2期の諸図像について—システィナ礼拝堂天井・壁画調査報告, 第5回」『美術史学』12 1990年 152—178頁
英文レジュメ “Michelangelo’s Second Period Paintings in the Sistine Chapel”, *Art History* (Tohoku University), 12, 1990, pp.60–74.
78. 「カルトーネ・ブンテジャートとディゼーニョ(素描)の確立—16世紀イタリア絵画史・展開の一側面」『美学』41(3) 1990年12月 1–11頁
79. “La missione di Hasekura a Roma e la cultura di Date Masamune”, Da Sendai a Roma Un’Ambasceria Giapponese a Paolo V, Museo Nazionale di Castel Sant’Angelo, 2 Ottobre–25 Novembre 1990, pp.83–88.
80. 「世界の中の日本美術 第8章 「マニエリスム」美術—平安時代1」『季刊MOA 美術』35 1990年夏
81. 「世界の中の日本美術 第9章 「マニエリスム」美術—平安時代2」同誌 36 1990年秋
82. “A New Observation on Sistine Chapel Ceiling Paintings by Michelangelo After the restoration”, *Annuario*, XXIV, 1990–1991, pp.31–38.
83. 「世界の中の日本美術 第10章 バロック彫刻1—運慶, 快慶」『季刊MOA 美術』37 1991年冬 52–59頁
84. 「世界の中の日本美術 第11章 バロック彫刻2—定慶, 湛慶」同誌 38 1991年春 52–59頁
85. 「ミケランジェロ作『天地創造』3場面と第3期の諸場面—1—システィナ礼拝堂天井画調査報告・第6回」『美術史学』13 1991年 145–164頁
86. 「世界の中の日本美術 第12章 バロック彫刻・絵画」『季刊MOA 美術』39 1991年夏 52–59頁
87. 「“メランコリー”の思想—芸術の根底にあるもの」(訳者解説)クリパンスキー, パノフスキー, ザクスル『土星とメランコリー 自然哲学, 宗教, 芸術の歴史おける研究』田中英道監訳, 榎本武文, 尾崎彰宏, 加藤雅之共訳 晶文社 1991年 572–602頁
88. 「世界の中の日本美術 第13章 バロック絵画—13・4世紀の絵巻物」『季刊MOA 美術』40 1991年秋 52–59頁
89. 「ミケランジェロ作, 預言者・巫女像及び第3期の諸場面—2—システィナ礼拝堂天井画調査報告・第7回」『美術史学』14 1992年 144–176頁
90. 「大仏師, 国中連公麻呂の作品の様式的認定」『東北大学文学部研究年報』41 1991年 1–34頁

91. 「芸術学の可能性 ― フォルモロジーについて」『芸術学の軌跡 芸術学フォーラムⅠ』勁草書房1992年 142-158頁
92. “Leonardo, architect of Chambord?”, *artibus et historiae*, nr.25, 1992, pp.85-102.
93. 「フレスコ画法の歴史について ― システィナ礼拝堂天井・壁画調査・余録」『学術月報』日本学術振興会 45(6) 1992年6月 549-553頁
94. 「世界の中の日本美術 第14章 「バロック」美術の終焉―十三, 四世紀の仏教絵画」『季刊 MOA 美術』41 1992年冬 78-85頁
95. 「世界の中の日本美術 第15章 「ロマンチズム」の美術 ― 室町時代の山水画」同誌 42 1992年春 68-75頁
96. 「世界の中の日本美術 第16章 「ロマンチズム」から「アカデミズム」へ ― 室町・桃山時代の障屏画」同誌 43 1992年夏 68-75頁
97. 「世界の中の日本美術 第17章 「ジャポニズム」の形成―Ⅰ 宗達・光琳派」同誌 44 1992年秋 68-75頁
98. 「ミケランジェロのシスティナ礼拝堂壁画研究」『東北大学学報』 1992年3月15日号 2-3頁
99. 「日本美術史における「様式」展開」『美学』44(3) 1993年12月 34-45頁
100. 「世界の中の日本美術 第18章 「ジャポニズム」の形成―Ⅱ 文人画, 大雅, 蕪村」『季刊 MOA 美術』45 1993年冬 64-71頁
101. 「世界の中の日本美術 第19章 「ジャポニズム」の形成―Ⅲ 文人画, 玉堂, 木米, 竹田」同誌 46 1994年春 70-77頁
102. 「世界の中の日本美術 第20章 「ジャポニズム」の展開―Ⅰ 第2の文人派と洋風画派」同誌 47 1994年夏 72-79頁
103. 「世界の中の日本美術 第21章 「ジャポニズム」の展開―Ⅱ 浮世絵の世界」同誌 48 1994年秋 76-83頁
104. 「ローマという“芸術”都市」『地中海文化の旅 3』地中海学会編 河出書房新社 1993年 98-102頁
105. “Concezioni scientifiche adombrate dagli affreschi di Michelangelo nella Cappella Sistina”, *Da Aristotele alla Cina. Sei saggi di storia dell'arte universale*, Bagatto Libri, 1994, pp.94-111.
106. “La testimonianza estremo-orientale nella pittura italiana nell'epoca di Giotto”, pp.129-132; “La seta in Giappone”, p.8, in *La Seta e la sua vita, ideazione e cura* Maria Telesa Lucidi, 23 gennaio-10 aprile, Roma, Palazzo delle Esposizioni, 1994.

107. 「日本における新出・イタリア美術作品の研究」(New discovered Italian Paintings in a Japanese Collection)『美術史学』15 1993年 95-104頁
108. 「終末のイメージ」『「終わり」からのメッセージ 世紀末を迎えて』東北大学教育学部附属大学教育開放センター 1994年 34-41頁
109. 「ダンテとミケランジェロ—「遠くからの愛 Amori de lonh」』『Angel』エンゼル財団 1993年秋 20-26頁
110. 「“他人の死”と“自己の死”—西洋美術の生と死」『人間その生と死』岩田靖夫, 塚本啓祥編著 平楽寺書店 1993年 49-72頁
111. “The Discovery of a Great Sculptor: Kimimaro of the Nara Period (710-793)”, *artibus et historiae*, nr.33, 1996, pp.187-220.
112. “The Process of the Nagoya City Sforza Reconstruction”, in *Leonardo da Vinci's Sforza Monument Horse: the art and the engineering*, ed. D.C. Ahl, Bethlehem and London, 1995, pp.129-135.
113. 「レオナルド研究Ⅰ モナ・リザ=イザベラ・デステ説 再考」『美術史学』17 1995年 125-143頁
114. “Reconsideration of the Mona Lisa as Isabella d'Este by Leonardo da Vinci”, *Art History* (Tohoku University) 17, 1995, pp.146-166.
115. 「湛慶・全作品の研究」『東北大学文学部年報』46 1996年 1-42頁
116. “The Techniques and the Meanings of Sistine Chapel Paintings by Michelangelo”, in *Scritti e Immanini in onore di Corrado Maltese*, Roma, 1997, pp.159-163.
117. 「15世紀イタリア絵画のアラビズム」『美術史学』19 1997年 94-114頁
118. “Arabism in 15th Century Italian Paintings”, *Art History* (Tohoku University) 19, 1997, pp.133-154.
119. 「西洋美学と『気韻生動』」『美術史学』19 1997年 1-11頁
120. “Aesthetics of Ch'i yun sheng tung: A Comparative Study with Western Theories of Art”, *Frontiers of Transculturality in Comptemporary Aesthetics*, Tauben, Thrin Italy, 2001.
— “A Comparison of Qui yun shen dong Aesthetics with Western Art Thories”, Rytai Vakara; Kurutury Saveika, Logos Vilnius, 2002, pp.42-52 (in Lithoanian).
121. 「レオナルド・ダ・ヴィンチと中国の影響—『モナ・リザ』の風景と山水画について—」『美術史学』20 1998年 181-196頁

122. “Influenza dell'arte Cinese nelle opere di Leonardo da Vinci. Il paesaggio della ‘Mona Lisa’ e il Sansuiga Cinese”, *Art History* (Tohoku University) 20, 1998, pp.198-214.
123. 「写楽はやはり北斎である ― 武者絵と春朗（北斎）の役者絵について」『東北大学文学部年報』48 1998年 103-136頁
124. “Sharaku is Hokusai — On Warrior Prints and Shunro's (Hokusai's) Actor Prints”, *artibus et historiae*, nr.39, 1999, pp.157-190.
125. 「セザンヌとジャポニスム」『美術史学』21 2000年 116-134頁
126. “Cezanne and Japonisme”, *artibus et historiae*, nr. 44, 2001, pp.201-220.
127. “L’Influenza Cinese e Mongola nella Pittura Senese del XIV secolo”, *Sindrome d'Oriente*, a cura di M. Civai e J. Vlietstra, Catalogo Giori, 31 Marzo-25 Maggio, 2001, pp.20-32.
128. 「西洋の風景画の発生は東洋から」『東北大学文学研究科研究年報』51 2001年 1-27頁
129. 「光源氏は大画家だった ― 中国の画題ではなく日本を描いたところに大画家・光源氏の真価がある」『日本文化』（拓殖大学日本文化研究所）4 2001年 4月 94-104頁
130. 「漱石、鷗外、天心とイタリア美術」『日本文化』（拓殖大学日本文化研究所）6 2001年10月 69-77頁
131. 「レオナルド派『接吻する幼児キリストとヨハネ』研究」『美術史学』22 2001年 169-186頁
132. “The Western Dragons and Chinese Influences”, in *Myths and Rituals of the Yangtze River Civilization*, ed. Y. Yasuda, Beijing, 2002, pp.234-252(中国語) .
133. “Simone Martini e l'Estremo Oriente”, *Oriente e Occidente*, Convegno in Ricordo di Mario Bussagli, Roma, 31 maggio-1 giugno 1999, a cura di C. Silvi Antonimi, B.M. Alfieri, A. Santoro, Università degli Studi di Roma ‘La Sapienza’, Pisa-Roma, 2002, pp.276-283.
134. 「イントロダクション」『西洋美術への招待』（監修・執筆）東北大学出版会 2002年 1-12頁
135. 「ローマにおける支倉六右衛門の肖像群について」『国際シンポジウム 日伊文化交流の500年 報告書』（ローマ大学, 仙台・川崎・東京）2001年 17-46頁（伊文）, 209-224頁（和文）
136. 「日本におけるイタリア美術研究」『国際シンポジウム 日伊文化交流の500年 報告書』（ローマ大学, 仙台・川崎・東京）2001年 141-152頁（伊文）, 313-322頁（和文）

137. 「北斎と遠近法・アナモルフォーズ」『美術史学』23 2002年 100-108頁
138. 「ドイツ・ゴシック“古典主義”とは何か」『「古典主義」美術の理論的研究』研究成果報告書 2004年3月 1-44頁
139. 「デューラー、ルターとイスラム世界 ― その『黙示録』版画研究』『美術史学』24 2003年 137-154頁

B 美術・文学評論・エッセイ

1. 「日本文学とは何か」『季刊藝術』1(2) 1967年7月 82-105頁
2. 「或いは死とかがやき ― 江藤淳論」『三田文学』55(1) 1968年1月 32-47頁
3. 「西洋文学とは何か」『季刊藝術』2(4) 1968年10月 84-109頁
4. 「冬の闇 ― ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールー 1」『季刊藝術』3(3) 1969年7月 128-137頁
5. 「冬の闇 ― ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールー 2」同誌 3(4) 1969年10月
6. 「冬の闇 ― ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールー 3」同誌 4(1) 1970年1月
7. 「冬の闇 ― ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールー 4」同誌 4(2) 1970年4月
8. 「冬の闇 ― ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールー 5」同誌 4(3) 1970年7月
9. 「冬の闇 ― ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールー 6」同誌 4(4) 1970年10月
10. 「文学的想像力と成熟 ― 或いは水源の“幼児”」『國文學 解釈と教材の研究』16(1) 1971年1月 60-67頁
11. 「有愁について、河上徹太郎論」『波』1971年5月号
12. 「“夜の画家(ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥール)”の影の男」『芸術新潮』22(10) 1971年10月 108-115頁
13. 「バロック懷疑論」『三彩』279 1971年11月 36-40, 45頁
14. 「文芸季評(10月号~12月号)」『季刊藝術』6(1) 1972年1月 10-15頁
15. 「ボルドーのグロテスク幻想」『美術手帖』349 1971年12月 109-120, 125-127頁

16. 「不安なルター画家たち」『みづゑ』808 1972年5月 17-37頁
17. 「15, 6世紀のフランスの彫刻」『世界美術大系』第10巻 学習研究社 1972年
292-293頁, 306-308頁
18. 「パリでの“あやうさ”」『江藤淳著作集』続4月報 1973年2月 [I A 3]
19. 「漱石と狂気 — 精神病跡学の病理」『自由』15(7) 1973年7月 174-188頁
20. 「ルーヴル, ラ・トゥール, ピカソ」『ふらんす』1973年11月号 4-7頁
21. 「フラ・アンジェリコ, アンドレア・デル・サルト他」『フィレンツェの美術』
II 小学館 1974年1月 81-106頁
22. 「ティエポロ, グアルディ, ティツィアーノ他」『フィレンツェの美術』V 小
学館 1974年9月 157-166頁
23. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー1ー」『季刊芸術』8(3) 1974年7月 128-
140頁
24. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー2ー」同誌 8(4) 1974年10月 108-124頁
25. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー3ー」同誌 9(1) 1975年1月 122-138頁
26. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー4ー」同誌 9(2) 1975年4月 146-164頁
27. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー5ー」同誌 9(3) 1975年7月 116-132頁
28. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー6ー」同誌 9(4) 1975年10月 112-128頁
29. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー7ー」同誌 10(1) 1976年1月 104-121頁
30. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー8ー」同誌 10(2) 1976年4月 102-118頁
31. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー9ー」同誌 10(3) 1976年7月 174-189頁
32. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー10ー」同誌 10(4) 1976年10月 180-194頁
33. 「レオナルド・ダ・ヴィンチー11ー」同誌 11(1) 1977年1月 160-175頁
34. 「廃墟とレオナルド」『芸術新潮』25(5) 1974年5月 32-34頁
35. 「老年の芸術について」『波』1975年5月号
36. 「『モナ・リザ』の本質」, 『Spazio』11 1975年10月 7-36頁
37. 「芸術と批評 — 三島由紀夫の死に寄せて」『文芸』14(8) 1975年8月 200-
215頁
38. 「海外体験と帰属意識」『國文學 解釈と教材の研究』20(14) 1975年11月 36
-41頁

39. 「＜最先端＞の芸術とは何か」『クエスト』 小学館 1977年12月 78-86頁
40. 「若き日のミケランジェロー上 ― 母と子, そして「愛」」『季刊藝術』12(3) 1978年7月 114-139頁
41. 「若き日のミケランジェロー中 ― 父と子, そして「戦い」」同誌 12(4) 1978年10月 138-167頁
42. 「若き日のミケランジェロー下 ― 囚われ人たち」同誌 13(1) 1979年1月 80-117頁
43. 「妊娠していた“モナ・リザ”」『芸術新潮』29(7) 1978年7月 116-119頁
44. 「夭折の画家の運命 ― ラファエロとミケランジェロ」『週刊朝日百科 世界の美術』45 1979年2月4日号 132-140頁
45. 「17世紀のフランス絵画 ― 写実主義と古典主義」『週刊朝日百科 世界の美術』58「ラ・トゥール, ル・ナン兄弟, プッサン」1979年5月6日号 197-221頁
46. 「光琳『燕子花図』」『日本絵画百選』山根有三編 日本経済新聞社 1979年 72頁
47. 「珠玉のアクロポリス美術館」『芸術新潮』30(11) 1979年11月 68-72頁
48. 「バロックと東洋」『Kawashima』1 川島織物 1980年11月 10-13頁
49. 「『モナ・リザ』の本当のモデルはイザベラ・デステ」『芸術生活』1980年12月
50. 「レオナルド・ダ・ヴィンチ『岩窟の聖母』, 『最後の晚餐』, コッサ『月暦図(5月)』」『世界の美術 8 宗教・物語』ぎょうせい 1981年 14, 41, 39頁
51. 「偶像崇拜の遍歴 ― 『ゴッホの手紙』から『本居宣長』へ」『小林秀雄をく読む』現代企画室 1981年 226-257頁
52. 「レオナルド『最後の晚餐』修復問題」『芸術新潮』33(2) 1982年2月 2-3頁
53. 「加筆された名画」『芸術新潮』33(3) 1982年3月 40-41頁
54. 「芸術家の手紙」『学燈』79 1982年3月 24-27頁
55. 「自画像と本当の顔 西洋自画像概史」『芸術新潮』「特集 画家の自画像 ― ウフィツィ美術館秘蔵」33(6) 1982年6月 49-57頁
56. 「レオナルド再考 ― ペイン『レオナルド・ダ・ヴィンチ』批判」『やっとはたち』フジヤ画廊 1982年 161-174頁
57. 「無常と日本の美意識 ― 鴨長明と運慶のこと」『國文學 解釈と教材の研究』28(4) 1983年3月 34-40頁

58. 「イザベラ・デステ」『ルネサンスの光と影』（歴史をつくる女たち・3）集英社 1983年 37-67頁
59. 「稀代の贋作者による〈フェルメール事件〉」『芸術新潮』34(7) 1983年7月 65-67頁
60. 「ふたたび陰翳礼讃」『郵政』1984年2月号 16-20頁
61. 「日本人による西洋学のすすめ」『学燈』1984年6月号 24-27頁
62. 「“絵巻”と“物語”の関係—『源氏物語絵巻』と『信貴山縁起』『伴大納言絵詞』について」『國文學 解釈と教材の研究』29(9) 1984年7月 20-27頁
63. 「レオナルド・ダ・ヴィンチの“水力”デッサン」『芸術新潮』36(3) 1985年3月 52-57頁
64. 「北斎と馬琴—その出会いと別れ—挿絵と本文の相補性について」『國文學 解釈と教材の研究』31(2) 1986年2月 76-82頁
65. 「洗ってびっくり色彩画家ミケランジェロ—システィナ礼拝堂500年ぶりの復活」『芸術新潮』37(2) 1986年2月 64-72頁
66. 「システィナ礼拝堂天井画の普遍性」『アートグラフ』27 1986年 39-43頁
67. 「ダリ論—その共時的考察」『ユリイカ』18(12) 1986年11月 148-161頁
68. 「〈芸術の王国〉について—『パノラマ島奇談』余聞」『ユリイカ』19(5) 1987年5月 144-152頁
69. 「Il Michelangelo della Sistina」『Mr. ハイ・ファッション』May, 1989, 152-157頁
70. 「絵姿で凱旋した伊達政宗の遣欧使節支倉常長」『芸術新潮』40(12) 1989年12月 76-81頁
71. 「ミケランジェロのシスティナ礼拝堂天井画の調査で思うこと」『学術月報』日本学術振興会 1989年10月 841-845頁
72. 「光と闇のコントラスト」『おん・えあ』MMTミヤギテレビ 1989年 Winter, 12月25日発行
73. 「クロード・ドゥルエ『支倉常長』について」『サントリー美術館ニュース』110 1990年1月30日発行
74. 「天平のミケランジェロを見つけた！—日光・月光菩薩、鑑真像、大仏を造った天才彫刻家」『朝日ジャーナル』32(22) 1990年6月8日号 14-19頁
75. 「日仏文化交渉史の先駆者発見、『支倉常長』像を描いたフランス画家クロード・デルュエ」『Nouvelle 日仏会館日仏協会通信』49 1989年3月号

76. 「『支倉常長一行』図の発見」『中央公論』1990年5月号 46-48頁
77. 「イタリア大統領宮の常長一行」「もう一人の主役、サン・フェン・バプティスタ」 「文化大使常長への歓待」『みやぎ県政だより』1990年4, 5, 6月号
78. 「西洋中心からの脱却 —『イタリア美術史』に寄せて」『聖教新聞』1990年12月14日号
79. 「劉生の西洋画理解度は？」『芸術新潮』42(6) 1991年6月 32-33頁
80. 「ルネッサンスの画家、ポントルモの日記」『東京新聞』1991年6月16日号(3枚)
81. 「インタビュー, みやぎの群像 204」『河北新報』1991年7月6日号
82. 「男性的性格が強い日本文化」『芸術新潮』42(8) 1991年8月 128-130頁
83. 「地中海の旅, ローマという芸術都市」『Report Kumagai』171 1991年 1-2頁
84. 「メランコリーと創造性」『Imago マインド・サイエンスの総合誌』1991年11月号 青土社 64-66頁
85. 「おかしな自画像」『Is』54 1991年 29-32頁
86. 「書評 國府寺司『フィンセント・ファン・ゴッホ — キリスト教対自然』」『美学』42(3) 1991年12月 69-74頁
87. 「外国人留学生見学旅行, 蔵王」『東北大学広報』1991年12月16日号 62-63頁
88. 「“モンゴルの平和”と“ルネッサンス”文化」『大いなる都 巨大国家の遺産 大モンゴル3』角川書店 1992年 152-7頁
89. 「書評 壮大な没落のイメージ ガントナー『レオナルドの幻想 大洪水と世界の没落をめぐる』」『図書新聞』美術出版社 1992年6月20日号
90. 「新美術時評 日本美術のご本尊」『新美術新聞』美術年鑑社 1992年2月21日号
91. 「新美術時評 大美術家の名前の欠落」同誌 1992年3月21日号
92. 「新美術時評 “歴史の終わり”と“芸術の終わり”」同誌 1992年4月21日号
93. 「新美術時評 オールド・マスター作品の収集を」同誌 1992年5月21日号
94. 「新美術時評 再びオールド・マスターの収集を」同誌 1992年6月21日号
95. 「新美術時評 ヴェネツィアでのレオナルド展」同誌 1992年7月21日号
96. 「新美術時評 京都の再生のために」同誌 1992年9月1日号

103. 「新美術時評 日本のガイド・ブック批判」同誌 1992年10月1日号
104. 「新美術時評 日本美術史の“様式”展開」同誌 1992年11月1日号
105. 「新美術時評 執筆者の顔龐招く美術書ブーム」同誌 1992年12月1日号
106. 「支倉常長考」『SAM 通信』みちのく芸術家協会 1992年11月3日創刊号 3頁
107. 「ミケランジェロ, システィナ礼拝堂天井画調査の意義」『東北大学学報』1993年1月1日号 29-31頁
108. 「装飾の博物誌60, 鶏」『チャイム銀座』1993年1月号 7-9頁
109. 「新美術時評 美術史なき? 美術史論集」『新美術新聞』1993年1月21日号
110. 「新美術時評 ローマのシルク・ロード展」同誌 1993年2月21日号
111. 「宇宙論と芸術, そして現在」『天体表現の芸術史的考察 研究成果報告書』1993年 2-7頁
112. 「今年の展覧会 1 大北斎展 2 ボイマンズ美術館展 3 ヴァティカンのルネッサンス展」『新美術新聞』12月11-21日号 8面
113. 「東西交渉の重要性」『宮崎市定全集・月報20』岩波書店 1993年 4-8頁
114. 「色彩の復活, 哲学の復活」『世田谷区文化情報誌・ゆとり路』1993年10月号 6頁
115. 「先端技術者, レオナルド・ダ・ヴィンチの夢は大空を舞う」『Scat Line』15号 テレコム先端技術研究支援センター 1993年 12頁
116. 「書評 若桑みどり『光彩の絵画, ミケランジェロのシスティナ礼拝堂天井画の図像解釈学的研究』, 小佐野重利『記憶の中の古代 ルネサンス美術にみられる古代の受容』」『美術史学』15 1993年 25-37頁
117. 「レンブラント『自画像』について, 真作一点主義への疑問」『MOA 美術』49 「美の一冊」1994年1月 52-53頁
118. 「メランコリーの忘却と芸術の衰退」『Imago マインド・サイエンスの総合誌』1994年8月号 8-9頁
119. 「レオナルド・ダ・ヴィンチにとって“水”とは何か」『AQUALOG : Kurita Water News』48 1994年 1-8頁

120. 「美術史の古本屋の悲劇」『世界の古書店』川成洋編 丸善ライブラリー 1994年 171-176頁
121. 「序 一 三つの五輪の塔の謎」『支倉常長と胆沢町 常長終焉地を探る』切田未良著 秋桜社 1996年 8 月
122. 「肖像の系譜 1 トスモーズ『女王ノフルテティ』」『聖教新聞』1994年 1 月15日号
123. 「肖像の系譜 2 作者不祥『ホメロス』」同誌 1994年 1 月29日号
124. 「肖像の系譜 3 オクタヴィアススの像」同誌 1994年 2 月26日号
125. 「肖像の系譜 4 藤原信実『源頼朝』」同誌 1994年 3 月12日号
126. 「肖像の系譜 5 ジョット『スクロヴェーニの肖像』」同誌 1994年 4 月 9 日号
127. 「肖像の系譜 6 マサッチオ『三位一体の寄進者』」同誌 1994年 4 月23日号
128. 「肖像の系譜 7 ファン・アイク『アルノルフィーニ夫妻の肖像』」同誌 1994年 3 月26日号
129. 「肖像の系譜 8 ピエロ・デラ・フランチェスカ『ウルビーノ公の肖像』」同誌 1994年 5 月14日号
130. 「肖像の系譜 9 ジョヴァンニ・ベルリニ『ロレダンの肖像』」同誌 1994年 5 月28日号
131. 「肖像の系譜10 レオナルド・ダ・ヴィンチ『モナ・リザ』」同誌 1994年 6 月11日号
132. 「肖像の系譜11 ラファエロ『カステリオーネの肖像』」同誌 1994年 6 月25日号
133. 「肖像の系譜12 デューラー『ホルツシュアー』」同誌 1994年 7 月 9 日号
134. 「肖像の系譜13 ホルバイン『エラスムス』」同誌 1994年 7 月23日号
135. 「肖像の系譜14 ポントルモ『宝石細工師の肖像』」同誌 1994年 8 月 6 日号
136. 「肖像の系譜15 ティツィアーノ『皇帝カルロス 5 世』」同誌 1994年 8 月20日号
137. 「肖像の系譜16 ティトレット『サン・ロッコの聖職者の肖像』」同誌 1994年 9 月13日号
138. 「肖像の系譜17 エル・グレコ『修道士バラビシーノの像』」同誌 1994年 9 月17日号

139. 「肖像の系譜18 ベラスケス『イソップ』」同誌 1994年10月10日号
140. 「肖像の系譜19 ルーベンス『子供の顔』」同誌 1994年10月22日号
141. 「肖像の系譜20 レンブラント『アリストテレスとホメロスの胸像』」同誌
1994年11月5日号
142. 「肖像の系譜21 ゴヤ『カルロス4世の家族』」同誌 1994年11月19日号
143. 「肖像の系譜22 北斎『芭蕉』」同誌 1994年12月3日号
144. 「肖像の系譜23 セザンヌ『ヴォラールの肖像』」同誌 1994年12月17日号
145. 「書評 ハボンという名の謎 支倉常長の悲運でなかったからこそそのスペイン
人名 中丸明著『支倉常長異聞 海外に消えた侍たち』宝島社」『図書新聞』
1995年6月21日号
146. 「書評 ルーヴルの変遷を物語る 戦闘目的で作られた城が美術の殿堂となる
まで 小島英著『ルーヴル 美と権力の物語』丸善ライブラリー」同誌 1995
年4月30日号
147. 「書評 巨匠の見逃された側面に光 長尾重武著『建築家レオナルド・ダ・ヴ
ィンチ』」『日本経済新聞』「読書」1995年9月25日号
148. 「対談 ウェルギリウスの魅力と今日的な意味」(長田 弘, 田中英道)『An-
gel』1994年秋号 27-32頁
149. 「レオナルド・ダ・ヴィンチ 人間信頼の思想と作品」『文』42 1996年 3-5
頁
150. 「支倉常長の西欧偵察外交」『地球日本史1』西尾幹二編 扶桑社 1998年
177-197頁
151. 「中国の真似でなかった美術」『地球日本史2』西尾幹二編 扶桑社 1998年
199-217頁
152. 「享楽は北斎である」『正論』321 1999年5月 240-49頁
153. “East meets West, Japan’s response to European art”, Art Quarterly, Summer,
2000, pp.43-49.
154. 「1 美術とは何か, 2 絵画とは何か, 6 見るための基礎, 7 様式について」
『絵画の教科書』日本文教出版 2001年(執筆担当箇所)
155. 「日本の美術の重要性」『「新しい歴史教科書」をつくる会』の主張』扶桑社
2001年
156. 「山根有三先生への個人的謝辞」『追悼 山根有三』真生流本部 2001年 20-
22頁

157. 「日本の文化史 国民の芸術」『産経新聞』15回連載 2002年11月
～171.
172. 「国民の芸術をめぐる 芳賀徹氏との対談」『産経新聞』2002年12月15日号
173. 「ミケランジェロと北斎・写楽」『美術画報』35 朝日コミュニケーション, 美術画報社 2002年
174. 「大仏と自由の女神 ― 夏目漱石やゲーテは民族のアイデンティティをなぜ美術
や建造物に見いだそうとしたのか?」『諸君!』34(6) 臨時増刊号 2002年
5月 文藝春秋社 238-251頁
175. 「聖徳太子は実在する!」『諸君!』35(6) 2003年6月号 157-167頁
176. 「日本のメディアを支配する“隠れマルクス主義”フランクフルト学派とは」『正
論』373 2003年8月 254-268頁
177. 「日本の若い知識人の退廃 ― 小熊英二『<癒し>のナショナリズム』の党派性」
『正論』376 2003年10月 152-156頁
178. 「天皇の玉音放送と歴史教科書」『史』2004年1月号
179. 「美を通じて歴史が私たちに語りかける」『翼』73 2004年1月
180. 「日本文化の世界的価値」『NTT BUSINESS』2004年4月号
181. 「日本人の激しさ, 厳しさ」『文藝春秋』82(13) 臨時増刊号「和の心日本の美」
2004年9月 27-29頁
182. 「“逃げる”といわせない日本の文化力」『翼』76 2004年12月号
183. 「インタビュー 言挙げせよ, 日本美術」『日本文化』2005年冬号 8-24頁